

**AND 賞**  
**Archi-Neering Design AWARD**  
第3回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2022





ジャンボ鯉のぼり (1988-、川口衛)  
科学（力学）と工学を駆使して生まれた芸術と技術の、美しくダイナミックな姿形。

## AND 賞の目指すもの

AND 賞が目指すものは、完成された建築作品としての評価だけではなく、そのプロジェクトがもつ固有の技術的テーマ（構造や環境など）を明らかにし、デザインプロセス、しくみ（システム）やしかけ（ディテール）、素材や施工法などを真摯にイノベーションに追求する人やチームを表彰することである。

## 「AND」とは、AND 展で見えてきたもの

アーキテクトデザイン（AND）とは、「建築と技術の融合・触発・統合の有様とそれを志向する理念」のことである。2008 年より 12 年以上にわたって国内外で開催されてきた AND 展では、時に 150 点余の模型・パネルが並び、数多くのフォーラムが開催された。

そこから見えてきたものは二つ。

第一に、「建築は織物だ」ということ。連綿と引き継がれる「技術」のタテ糸は強靱であり、感性や社会的欲求を映す「芸術」のヨコ糸により、時代の模様が描かれている。その交点には常に両者の葛藤や協同の物語がある。

第二に、「技術は空間を介して建築とつながっている」ということ。意匠が失われても空間はあるが、構造なくして空間は成立しない。イメージとテクノロジーの有機的な融合・協同の結果として、「美しく合理的な」「合理的で美しい」建築の空間形態が生まれている。そのことは歴史的にも検証されていよう。

## AND 賞で評価したいと考える視点

今の時代の頂点としての「点」の建築の評価は既に多くの建築賞で選定されている。

AND 賞は時代が求める建築を、作品という「点」として捉えるのではなく、美しい歴史的建築を実現に導いた一連の芸術と技術の融合というプロセスから学び、未来へ繋げていくという「線」や「面」のような普遍的・横断的視点をもって追求する一貫した姿勢と業績を評価したい。

- ▷ 発想から実現に至る技術的テーマ性のあるデザイン・プロセス
- ▷ 個性的作品性だけではない普遍的技術の創造
- ▷ システム・素材・ディテール・工法などの新しい発想・工夫

新築、恒久的な建築作品だけでなく、再生や仮設、橋など建築以外の構造物、階段などの部位や家具・オブジェなどスケールの小さな作品も本賞の対象としたい。

# 第3回 AND 賞をめぐって

AND 賞実行委員長 斎藤 公男



斎藤 公男  
SAITOH Masao  
A-Forum 代表  
日本大学名誉教授

1938 年群馬県生まれ /1961 年日本大学工学部建築学科卒業 /1963 年同大学院修士課程修了 /1973 年同大学工学部助教授 /1991 年同大学工学部教授 /2007～2008 年日本建築学会第 50 代会長 /2008 年日本大学名誉教授  
主な受賞：1987 年日本建築学会賞（業績）、1993 年松井源吾賞、1997 年 IASS（国際シェル・空間構造学会）坪井賞、2002 年 Pioneer Award、1978 年・1991 年・2003 年・2021 年 BCS 賞、2007 年日本建築学会教育賞、2009 年 IASS Torroja Medal、2018 年日本建築学会大賞  
主な著作：「新しい建築のみかた」（エクスナレッジ）、「空間構造物語」（彰国社）

第 3 回となる AND 賞 2022 の最終選考会も無事終了することができ、心より安堵すると共に、応募された方々、選考委員ならびに運営を支えて頂いた多くの皆さんに心より感謝申し上げます。何事であれ、新しい試み（イベント）は三度目が最も重要といわれます。昨今の厳しい社会状況の中、今回の AND 賞の成功は価値ある大きなステップを刻めたものと喜びにたえません。

コロナ渦がなかなか収束されない時期、第 1 回および第 2 回の最終選考会は建築会館大ホールにて行われたが、今回は日本大学工学部の「CST ホール」へと選考会場を移すことが出来た。この建物の竣工は 2003 年。著名な建築家（当時日本大学教授）高宮眞介氏、渾身の力作である。わけてもこの 1 号館の 6 階にある「CST ホール」の空間デザインは他に類のない出来栄えと思っている。私が学科主任の際、教授一同の署名をまとめ建築設計を高宮氏にと、大学本部に嘆願した経緯もあった。AND 賞の選考会として最高の舞台だ、と感慨はひとしおであった。

今回、第 3 回の選考委員長ならびに選考委員には昨年と同様に、福島加津也（建築家）ならびに堀越英嗣（建築家）、陶器浩一（構造家）、磯達雄（建築ジャーナリスト）の各氏にお願いした。各自の建築界における永年の業績はもとより、様々な建築賞の審査経験が豊富であるということはいままでのない。そして私が最も信頼のできる AND 賞の選考者としてふさわしいと考える理由のひとつは、ある重要な価値観を共有していることである。それは 2020 年 10 月 10 日に行われた「AND 賞設立記念フォーラム」での講演のなかで、期せずして山本学治（1923-1977）の論考「風の糸」への同感の意が発せられていたからに他ならない。

AND 賞への応募数は第 1 回は 55 件、第 2 回は 40 件、そして第 3 回は 27 件であった。応募件数の減少はある程度予想していたものの、問題は内容。件数だけでなく作品の質や評価も下降したら、と心配された。しかしそうした危惧は全く不要であった。10 作品を選ぶ 1 次選考（12/17）から議論は沸騰した。惜しくも入賞を逃したいくつかは、別の機会に是非共もつと踏み込んだプレゼンを聞きたいものがあつた。いずれ機会があれば…と願っている。

さらに最終選考に進んだ 10 作品はいずれも独自のテーマをもっており、建築的魅力と共に強い技術的創意や先端性を放っているように感じられた。実際に訪ねてみたい。そう思わせる作品ばかりであった。これは難航するな、との予感通り、各自のプレゼンを終えた後の選考会場は異様な緊張感に溢れていた。その状況は選考委員から発せられた「苦渋の判断との対面」の言葉からも充分読み取れた。各委員のコメントの数々は実に鋭く興味深いものであつた。まさに AND 賞に学ぶ、の感があつた。

AND 賞とは何か。その答えは定まっていらないと思う。そこに参加する人々の思考と情熱とが創っていくもの。あらためてそのことが実感できたのも今回の選考会であった。最終段階では各々の選考委員が抱く AND 賞に対する評価軸も吐露された。個性をにじませながらも大局的にはぶれない価値観が共有されていると確認された。そのことが AND 賞の最大の特徴といえよう。

今回の「AND 賞」に入賞した 10 作品をより広く深く伝えるために、昨年同様、今年には建築会館・建築ギャラリーでの AND 展（2023 年 11 月 1～8 日）を開催する予定である。模型に加え、動画紹介も企画したいと考えている。

2007 年に建築学会から発信された「アーキテリング・デザイン（AND）」の小さな理念がさまざまなカタチで育っている。この AND 賞もまた、あたかも“ Butterfly Effect” の波紋のように今後につながっていくことを期待したい。



建築会館ギャラリーにおける「AND 展 2022」の会場風景



# 選考経過と総評

AND 賞選考委員長 福島 加津也



福島 加津也  
FUKUSHIMA Katsuya

建築家  
福島加津也  
+ 富永祥子建築設計事務所  
東京都市大学工学部建築学科  
教授

1968年神奈川県生まれ  
/1990年武蔵工業大学工学部  
建築学科卒業 /1993年東京藝  
術大学大学院美術研究科修了  
/1994年～2002年伊東豊雄  
建築設計事務所 /2003年～現  
在 福島加津也+富永祥子建築  
設計事務所 / 現在 東京都市大  
学工学部建築学科教授

主な受賞：2005年 JIA 新人  
賞 /2019年 住宅建築賞金賞 /  
2015年 日本建築学会賞（作  
品） /2018年 ユネスコアジア  
太平洋文化遺産保全賞 /2020  
年 DAM ARCHITECTURAL  
BOOK AWARD（ドイツ建築  
博物館）

主な作品：2004年 中国木材名  
古屋事業所 /2008年 柱と床  
/2013年 木の構築 - 工学院大  
学弓道場+ボクシング場  
/2017年 時間の倉庫 - 旧本庄  
商業銀行煉瓦倉庫 /2021年 高  
床の家

昨年度の第2回に続いて、今年度に第3回のAND賞が開催されたことを大変うれしく思います。

前世紀の経済発展と進歩礼賛という単純化された目標から、現代の持続と発展の両立という重層的な状況の中で、工学と美学の融合を目指すアーキニアリングというテーマにはさらなる多様性が求められ、環境や建設、改修やものづくりにまで広がります。このため、AND賞の選考委員も多様な分野になり、経験豊富な建築家として堀越委員、構造設計にとどまらず大学での教育や震災復興など幅広い活動をしている構造家の陶器委員に、日本では貴重な存在である建築批評家として磯委員に、若輩の建築家として福島、という4名で構成されています。

一次選考では、すでに多くの受賞を得ている著名な作品から、大学院生による仮設建築まで、幅広い分野から27作品の応募を得ました。その中から、AND賞の意義にふさわしい10作品が入賞として選ばれて、最終選考に進みました。最終選考は十分な感染対策を施した上で、対面とオンラインを選択できるハイブリッド方式を整えて、さらにYouTubeでのリアルタイムの配信を行うことで、幅広い方々に聴講していただきました。これらは、実行委員会をはじめとする関係者のみなさんの大きな尽力によるものです。

当日のプレゼンテーションは発表が4分、質疑応答が6分の計10分です。登壇者のみなさんの説明は分かりやすく、事前に十分な準備をしていただいたことが伺える発表でした。全体としてはどれも粒ぞろいで、先端的な技術の提案が印象に残ります。

10作品のプレゼンテーションの終了後に、最優秀賞を決める審査が始まりました。まず、4人の選考委員各審査委員がそれぞれの今年度の審査基準を明らかにしました。この中で、堀越委員の「統合力」、磯委員の「やり切ること」、陶器委員の「ものづくりのプロセスと対話」、福島委員の「初源性」が挙げられました。その後、1人4票で投票を行いました。満票の作品は1つもなく、3票が2作品、2票が5作品と、今年度はここで審査員の票がわかれませんでした。多様性というAND賞の性格のため、最優秀を決めることが難しいことは予想していましたが、それぞれの作品の特徴や規模が大きく異なるため、議論がとて難しかったです。最終選考での議論の進め方は、次年度以降の宿題です。そうして、3票を獲得した「一松山 本興寺 本堂建替計画」と「Yamasen Japanese Restaurant」が残り、2票を獲得した5作品について2回目の投票を行い、3票を獲得した「Stealth brace」、「出窓の塔居」、「グラウンドルーフ」の3作品を加えて、合計5作品が最優秀賞の選考に残りました。

残った5作品には、1分の追加アピールの時間を取りました。審査員と登壇者の議論を双方向に活性化したい、という思いから、昨年度から始まった仕組みです。こうして、みなさんからのさらに熱いアピールを得ることができました。その後の最優秀賞の選考で審査委員が1人1票の投票を行い、堀越委員と磯委員と福島委員が「Yamasen Japanese Restaurant」、陶器委員が「グラウンドルーフ」を選びました。この投票の意向を確認して、全審査委員一致で「Yamasen Japanese Restaurant」を最優秀賞、他の4作品を優秀賞とすることになりました。

昨年もこの総評で書かせていただきましたが、この審査で議論されていたのは、今年度も建築の個別性と普遍性を両立することであったように思います。この普遍性と個別性の両立が現代の建築にとって重要な課題となっているのですが、近年の建築界でこのような議論が行われることがとてま少なくなっているように感じています。複雑で難しいテーマかも知れませんが、AND賞での議論がその一助となることを期待しています。



# 選考を終えて

AND 賞選考委員 磯 達雄



磯 達雄  
ISO Tatsuo

1963 年埼玉県生まれ 1988 年名古屋大学工学部建築学科卒業後、日経 BP 社で雑誌「日経アーキテクチャ」の編集に携わる、2000 年独立、2002 年フリックススタジオ共同主宰、2020 年 Office Bunga 共同主宰。

2001 年から桑沢デザイン研究所非常勤講師、2008 年から武蔵野美術大学非常勤講師を兼務。主な著作に『昭和モダン建築巡礼 西日本編／東日本編』（宮沢洋との共著、日経 BP 社刊）、『ポストモダン建築巡礼』（同）、『菊竹清訓巡礼』（同）、『ぼくらが夢見た未来都市』（五十嵐太郎との共著、PHP 研究所刊）など

審査の基準として重視したのは、前回までと変わらず、意匠と技術の高度な統合が果たされているかである。これに加えて、他の建築賞では選びにくい、仮設構築物や工法に類するようなものも積極的に拾い、審査のテーブルに乗せるよう心がけた。また、プロジェクトごとに異なる様々な設計条件をとらえて、一期一会の機会を活かしている作品を選びたいとも考えた。

今回の審査で 1 次審査の段階から感じたのは、提出された作品の全体にわたるレベルの高さだった。検討するまでもなく選から落ちる作品がほとんどない。これは AND 賞も 3 回目となり、審査する側と応募する側とで、評価の基準が近づいてきたということなのかもしれない。レベルの高さは、1 次審査を通過した 10 作品にも言え、最終審査においても、どれを選出するか、最後までおおいに迷うこととなった。

1 回目の投票で選んだのは、「一松山本興寺本堂」「出窓の塔居」「WASTE PAVILION」「グラウンドルーフ」である。「本興寺」は、直線の木材によってこれまでにない象徴的な空間を生み出している。奥まるに連れて連続的に高くなっていく天井は、東京カテドラルをも想起させた。「出窓の塔居」は、狭小敷地の住宅において出窓という環境装置を活かし、それが構造にも人の居場所にもなっているというもの。「WASTE PAVILION」は大学の学園祭のためのパビリオンだが、身の回りのものを再利用するという手法が幾重にも織り込まれている。学生が取り組むプロジェクトとして、今後もこの水準のものはなかなか出ないだろうと思わせる出来だった。「グラウンドルーフ」は、ふわりと浮かぶ薄い屋根を、最適化の設計手法で作り上げている。暫定施設の駐車場という、通例ならデザインが追求されにくいプログラムに対して、意匠設計者と構造設計者が共同することにより、街の中になたずまいのよい構築物をつくることに成功した。こうした点を評価しての、4 作品の選出であった。

この時点で審査員の票が割れたため、2 票を獲得した 5 作品を対象とする 2 回目の投票が行われることとなった。この段階で選んだのは、「出窓の塔居」「グラウンドルーフ」「Stealth brace」の 3 作である。「Stealth brace」は歴史的木造建物への耐震補強をどうすれば目立たないように行えるかに取り組んでいる。他の審査員からのコメントを聴きながら、この技術の普遍的意義について改めて認識するとともに、うまくいけばいくほど消えていく工法というのは、AND 賞でなければ評価しにくい対象だろうとも考え、選に加えた。逆に「WASTE PAVILION」は、アップサイクルというテーマから実現した構築物への展開がストレートすぎることから、惜しくも落とすことになった。

ここまでの審査で、「本興寺」「Stealth brace」「出窓の塔居」「Yamasen Japanese Restaurant」「グラウンドルーフ」の 5 作が最終候補に残り、1 作に絞る投票が行われた。ここで選んだのは「Yamasen Japanese Restaurant」である。1 回目の投票では入れなかったのだが、追加のプレゼンテーションで見た、ウガンダの人たちによる建設の様子が印象的で、評価が高まった。ハイテックな技術も大事だが、人間がつくるための技術も大事だと、改めて考えさせられたのである。そして何よりこの作品は、出来上がっている建築が、ウガンダでつくられたものとして良いのではなく、世界中で建てられている建築の中でも良いという水準に達している。ヴァナキュラリズムを超えたところで、その合理的な美を評価できる点が、この作品を逆転 1 位に推した理由であった。



(撮影：堀田貞雄)

陶器 浩一  
TOKI Hirokazu

1962 年生まれ。1986 年京都大学大学院修了。1986～2003 年日建設計。2003 年滋賀県立大学助教授 2006 年教授、現在に至る。

主な作品：キーエンス本社研究所ビル、愛媛県歴史文化博物館、愛媛県美術館、梅田ダイビル、兵庫県芸術文化センター、積層の家、清里アートギャラリー、澄心寺庫裏、海光の家、半居、福良港津波防災ステーション、竹の会所、さとうみステーション、クアパーク長湯など。

受賞：JSCA 賞、Outstanding Structure Award (IABSE)、松井源吾賞、日本建築学会賞(技術)、日本建築大賞、日本建築学会作品選奨など

AND 賞も今年で 3 回目となりました。3 回目で少しペースダウンするかと思いきや全くそんなことはなく、組織のビッグプロジェクトからアトリエの小住宅、学生ワークショップに至るまで、今年も個性豊かな作品が並びました。これら多種多様な作品を横並びで評価することが AND 賞の最大の特徴といえるでしょう。毎年述べていることですが、AND 賞の評価軸は、ただ美しい作品や優れたエンジニアリングだけではなく、ものづくりのプロセスにあります。その中で今年の私のキーワードは「対話」にしました。エンジニアとアーキテクト、設計者と施工者、建築と社会、いろいろな「対話」があると思います。作品を創るプロセスで、お互いを高めあいながら「対話」のなかで作品を昇華させて行った作品に注目しました。

「一松山本興寺本堂建替計画」は方錐形屋根の本堂と会堂が対角で向かい合う木造建築ですが、最初資料を拝見した段階では、主構造は方錐の折板構造で成り立っており、HP 形状の内部空間を特徴づけている三角フィンが構造に寄与しない“意匠”であると思っていました。改めてスタディ過程の話を聞くと、折板構造だけだと高さのある妻壁を支持する大断面の柱が必要になるので、同一レベルで設定した軒と稜線をつなぐ三角フィンの合掌を主構造とすることを思いつき、そのことが単調な内部空間を引き締め特徴あるものにしていったことがわかりました。「構造即意匠」という伝統木造の精神を現代的に解釈した新しい建築といえます。

「千光寺頂上展望台 P E A K」は小高い山の展望台とロープウェイ乗り場をつなぐ歩道橋です。起伏があり大きな岩が点在するという地形条件から、新設基礎による掘削を最小化すること、レベル差により柱長さが異なり曲げ抵抗の柱とすると偏心が生じること、という純技術的課題を解決するために逆 V 型の支柱を向きを変えて配置し、そのことで、単調になりがちな橋梁構造物に動きを与えています。橋梁の意匠というと装飾的なものになりがちですが、土地に正直に、まじめに向き合ったスタディにより、シャープで特徴ある形態が実現されています。

「Yamasen Japanese Restaurant」は、ウガンダに建てられた商業施設ですが、設計者は以前から現地で継続した活動をしており、現地で入手可能な素材を選択し、“その土地だからこそできる作られ方”を現地の人々と共に模索しています。途上国でのローカルな技術を用いるというバナキュラーな建築になりがちなのですが、ただ現地の素材や構法のみには頼るのではなく、金物ジョイントなど現代的なものも用いながら現地の技術を応用した結果が、ここでしかできない洗練された建築を実現させたといえると思います。

「グラウンドルーフ」は学校に付属した暫定的な駐車場とトイレ、渡り廊下ですが、スケールも用途も違う 3 つの建築に共通するものとして、50 mm 角型鋼管を 500 mm グリッドでの構成を見出し、12m スパンの大屋根を架け渡すため、互い違いに最大 5 段積層させた屋根架構として少し湾曲させています。小さなものの集積でできた架構が繊細で清々しい空間をつくりだしています。即物的でありながら美しいデザインがされていて、単にミニマルを目指しただけでないプロセスと出来上がった空間に AND らしさを感じました。

これら 4 作品の「対話」が特に印象的でしたが、最終選考に残った作品はいずれもそれぞれ別の視点で AND の精神を具現化したものであり、その中から最優秀候補一点を選ぶのは非常に困難でした。

今年は最初から全員がイチオシする NO.1 がありませんでしたが、そのことこそ、AND というの多様性を示すものであり、AND という概念が少しずつ定着してきたことの表れでもあるかと思えます。

## AND 賞選考委員 堀越 英嗣



堀越 英嗣  
HORIKOSHI Hidetsugu

1953年東京生まれ 1976年東京藝術大学美術学部建築科卒業、1978年同大学院修了後、丹下健三・都市・建築設計研究所にて東京都庁舎競技設計最優秀案、パリ、イタリア広場、SINGAPORE, MARINA SOUTH、旧赤坂プリンスホテル、横浜美術館等担当 1986年アーキテクトファイブ共同主宰、モエレ沼公園（イサム・ノグチと共同）、とっとり花回廊、新潟駅舎駅前広場等、2005年堀越英嗣 ARCHITECT 5 設立、五島美術館改修、正願寺等、日本建築学会賞（業績）、同作品選奨、グッドデザイン大賞、BCS 賞等共同受賞、2001年鳥取環境大学教授、2004年芝浦工業大学教授、2017年建築学部長、芝浦工業大学名誉教授

第3回となる AND 賞 2022 は新型コロナウイルスに加えてロシアのウクライナ侵攻という人類の危機が始まり現在まで続いています。そのような状況の中、科学技術力を平和と共存のために役立てること、小さく意義深い提案から、社会の構造変化に対応するプロジェクトまで、発見と協力によって明るい未来への道を開く提案、作品を AND 賞として見出したいという気持ちで審査に臨みました。

今回27の応募がありました。全体の印象は賞が目指す趣旨に合った真摯な技術的、芸術的追求の作品が殆どで、これからの社会を見据えた建築の役割を多くの方々が共有し始めた手応えを感じています。一次選考では票が分散したが、それだけに多様な視点を持った作品が多く、慎重な議論を経て10作品が2次選考へ進みました。

第一次選考から個人的に興味深かったのは「Yamasen Japanese Restaurant ウガンダの地元技術と素材を用いた、ユーカリによる木造建築の実現」でした。ウガンダは現在、世界最貧国の一つだが、22世紀初めには世界人口の38%となることが予想されるアフリカの人口上位10ヶ国中8位に入る将来の中心国の一つである。アフリカは広大な面積と埋蔵する資源を持ち、21世紀のフロンティアと呼ばれているが、将来の地球環境の鍵を握る地域でもある。現在日本も含めた先進国と言われる北側諸国は将来の地球温暖化を乗り切る先進的技術を生かした持続的発展の新しい価値観をアフリカと共有すべき時である。そのような状況で日本の建築家がグローバル資本主義に乗った消費社会のスターではなく、アフリカの将来のあるべき建築の姿を地域特性を踏まえた素材、技術を活用したサステナブルデザインのモデルとして示すことは建築家、技術者のあるべき姿であり、それを実現していることは最優秀賞に相応しい。その努力に敬意を評したい。

優秀賞に残った4作品で、「出窓の塔居」は講評で記します。「Stealth brace」は伝統建築を当時の姿に近い状態で展示することの視覚的障害となる従来の耐震補強ではなく土木分野の斜張橋の高張力鋼線のブレースを埋め込む画期的な技術とアイデアで、開放的な歴史的木造建物の耐震補強を実現している。「一松山 本興寺 本堂建替計画」は最先端の木造建築技術と意匠の融合の追求による王道の現代寺院建築である。「グラウンドルーフ」は、一見合理的と見える構造のサイズや形態を予め予想し、単純な形態に収めるという美学ではなく、構造限界をトライアンドエラーで探しながら徐々に正解の形態を発見していく最適なプロセスの追求という手法の提案である。予定調和的の美学に収めるため無視されがちな微細な変化の形を発見することで生まれた形態は固定概念化されているモダニズムのシンプルさにはない生命的美学を感じる提案である。入選となった作品について、「斜と構」は講評で記します。「流山市立おおぐろの森中学校」はサステナブルな木造の校舎を市松ブレースという技術の発見で新たな空間構成の可能性を示している。「HAGOROMO BENCH」はステンレス 3D プリントによる自由な形態ではなく新しい質感の実現に可能性を感じた。「千光寺頂上展望台 PEAK」は独創的建築アイデアを四つに組んだ構造設計者の優れた構造提案で実現している。最後に「WASTE PAVILION」は完璧に考えられたサステナブルな学園祭のパビリオンで、大学院生としての力量の高さに驚かされる。将来が楽しみな優秀な提案である。

最後に、残念ながら二次審査には進めなかったが、「SUMU」「RIPPLE」に不思議な魅力を感じ、「3,150 ▶ 2,700」「古平市複合施設」に真摯な追求の姿勢を評価したい。



最優秀賞

# Yamasen Japanese Restaurant

ウガンダの地元技術と素材を用いた、  
ユーカリによる木造建築の実現

応募代表者 : 小林 一行 (TERRAIN architects/ テレインアーキテクト)

共同応募者 : 金田 充弘 (東京藝術大学)、鈴木 芳典 (TECTONICA)、櫻村 芙実 (TERRAIN architects/ テレインアーキテクト)

【応募理由】ウガンダは赤道直下にありながら標高が1.2kmと高く、一年中快適な気候である。ここに生息するユーカリは、成長が早く現金化しやすいため、工事現場の足場や支保工として安価に販売され、利用後は廃棄されることが多い。耐久性、耐腐朽性に優れたこの材に注目し、大屋根を支える構造材として使えるよう丁寧に乾燥、製材、管理を行なった。各フレームは、現場で溶接・制作された5種類のスチールジョイントとボルトによって接合。基礎の焼成レンガや屋根の茅葺に至るまで、現地職人と共に最適な方法を探りつつ、構造的合理性も担保した。首都近郊の建設ラッシュの中で、現地の気候や文化、見過ごされてきた素材の価値を発信する拠点として認知され始めている。(小林一行)



東立面、煉瓦とRCで造られる基礎は、緩やかな斜面地にフレームを支える水平面を提供している。



製材は地元のワークショップ(工房)で行う



重機を用いず人力で16のフレームを建ち上げ



建築家は現場常駐し職人との調整を行う



手製の焼成煉瓦の丁寧な選択と積み上げ



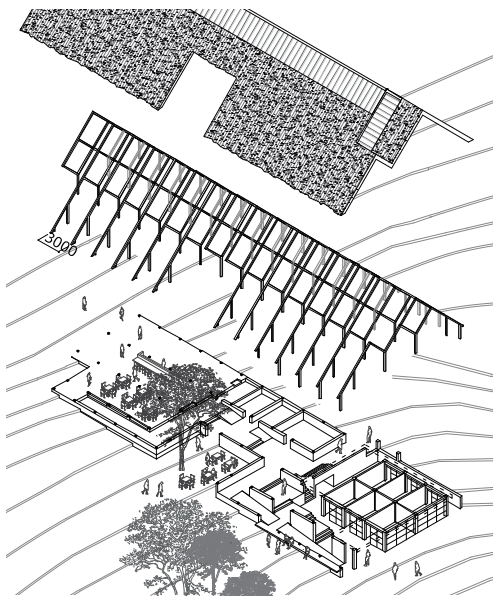


【講評】アフリカのウガンダに建つ木造の日本食レストランである。地元職人でできる技術と、日常的に手に入る素材を用いて作られている。しかし、現地のものしかダメという地域原理主義に陥ることなく、透明感のある架構やスチールの金物など、現代的な要素と融合させている手さばきがすばらしい。

木材はウガンダで安価に流通しているユーカリを 2×6 に製材し、16 組のフレームが高額な重機を使わずに人力だけで立ち上げられている。茅葺屋根や焼成煉瓦など、現地では見過ごされている素材もていねいに表現されて、新しい価値観を生み出している。

建築家は 10 年以上もウガンダで活動し、現地での建設活動を通して敷地の選定や機能の企画、工法や材料の選択まで関わってきた。それが結果的に良質な職人の育成となり、さらに地域住民にまで拡がり、この土地だからこそできる作り方が建築文化の種を植えることになった。

建築づくりを基点とした地域づくりは、現代の建築にとって世界的な関心を集めている。建築技術が発展途中で精度が低いウガンダだから、日本人が海外で頑張っているから、というステレオタイプを飛び越えて、この作品はものづくりの初源性を獲得している。(福島)



16本のフレームが3m間隔で建ち上がっている。



乾燥は現場近郊にある家具工場の窯を使用



フレーム上部は立上げ後に大工が部材接合



ベースプレートはJ型ボルトで基礎へ接合



地元の茅葺職人による屋根葺き作業

写真：Timothy Latim, TERRAIN architects



優秀賞

## Stealth brace (ステルスブレース)

開放的な歴史的木造建物への耐震補強

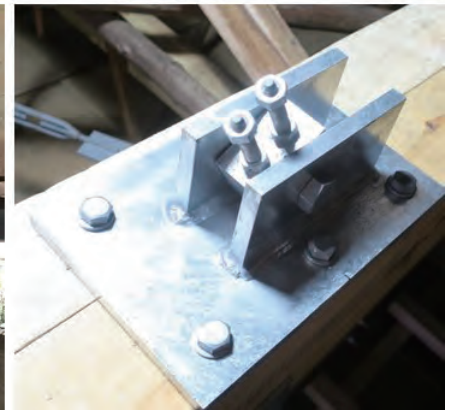
応募代表者：北 茂紀 (北茂紀建築構造事務所)

共同応募者：井上説子、海津秀樹 (伊藤平左工門建築事務所)、松田仁、永峰馨、今森勝貴 (神鋼鋼線工業)

田川英樹 (FABSPACE JAPAN)、宮里直也 (日本大学理工学部 空間構造デザイン研究室)

豊田亮博 (北茂紀建築構造事務所)

【応募理由】ステルスブレースは、開放性の高い伝統木造建物に対する新しい耐震補強方法です。束にして橋梁などのケーブルとして用いる $\phi 7\text{mm}$ の亜鉛めっき鋼線を1本だけ使い、障子間に仕込むことで開放性を損なわずに耐震性を確保することが可能となっています。また多くの試験を実施し、圧縮時の座屈防止、解体を最小限に抑えた施工方法、十分な靱性の確保を実現しています。竣工時にはその姿をうっすらと障子に映すだけの、目立たないことを目的とした耐震補強方法の提案ですが、AND 賞ならば我々の想いを評価して頂けると考え応募させて頂きました。(北 茂紀)



【講評】文化財やそれに類する木造建築物を後世に残して伝えるには、建物の耐震化が必要となる。しかし、日本の伝統的な木造建築はその開放性を大きな特徴としており、壁を増やしたり、筋交を入れたりするといった方法では、本来の空間が備える魅力を大幅に損ねてしまう。この問題を解決するべく、応募者が開発したのが、高張力鋼で製作された $\phi 7\text{mm}$ の亜鉛めっき鋼線を、2枚の建具に挟まれたわずかな隙間に通して補強するという方法であった。好文亭楽寿楼で実際に施工された状態を写真で見ると、障子を透かして斜めの線が走っているのはわかるものの、その存在感は明らかに希薄化されている。既存建物の解体も最小限で済むことから、広く文化財の建築に普及が期待される技術である。この材料は、もともと長大な斜張橋のケーブルなどで用いられていたものであり、これを真逆な性質を持つ木造建築に活かした点も面白い。(磯)



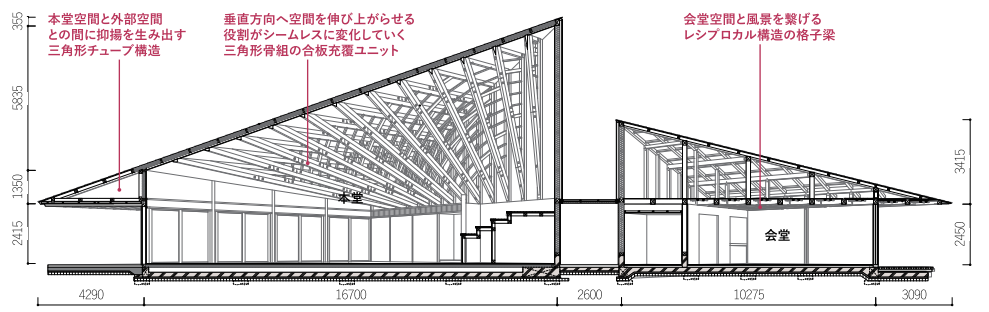
# 優秀賞

## 一松山 本興寺 本堂建替計画

応募代表者：新関 謙一郎 (NIIZEKISTUDIO)

共同応募者：山田 憲明、香取 佑弥 (山田憲明構造設計事務所)、加藤 忠弘 (NIIZEKISTUDIO)

【応募理由】戦前より地域の檀家が気軽に集う場所となっていた寺の本堂の建替計画です。本堂を訪れた人々は低く深い軒下を抜けて、本堂の内部空間に入ることができます。低く深い軒は三角チューブ構造として鉛直荷重をねじれ剛性・耐力で両側面まで伝える仕組みとし、約3mの跳ね出しを可能としています。そして、6.5間四面の本堂内部空間では、屋根面を合板による折板構造として隅木を支え、さらに三角形骨組の合板充覆ユニットによって面外風圧を受ける広大な妻面と屋根面を支持しています。このユニットは壁が高く隅木までのスパンが小さい水上では耐風柱の役割が強く、壁が低く隅木までのスパンが大きい水下では屋根梁の役割が強くなるという、シームレスに役割が変化していく構造要素となります。(新関 謙一郎)



【講評】この建築は寺の本堂建て替え計画であり、方錐形屋根の本堂と会堂が対角で向かい合う特徴的な形態をした木造建築である。一見、主構造は方錐形状の折板構造で成り立っており、910 mmピッチに配置されHP形状の内部空間を特徴づけている三角フィンが構造に寄与しない「意匠」であるように見える。

改めてスタディ過程の話を知ると、折板構造だとすると高さのある妻壁を支持する大断面の柱と屋根をスパンさせるための大断面の梁が必要になるので、同一レベルで設定した軒と稜線および屋根面をつなぐ三角フィンの合掌を主構造としたことがわかった。一般的には折板構造で解いてしまうところだが、三角フィンの合掌が連続する構造を思いつき、そのことが単調な内部空間を引き締め、特徴あるものに昇華させている。「構造即意匠」は伝統木造の精神であるが、それを現代的に解釈した新しい木造建築といえる。(陶器)



# 優秀賞

## 出窓の塔居

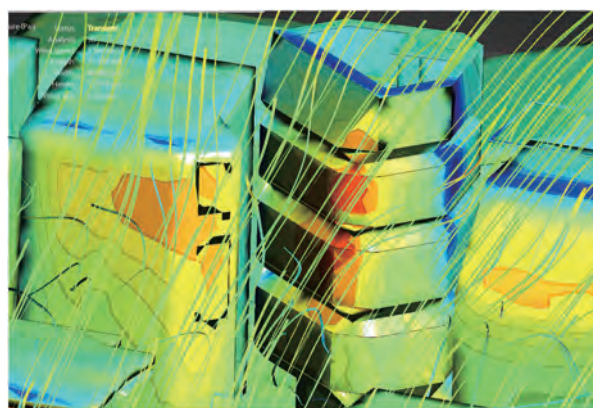
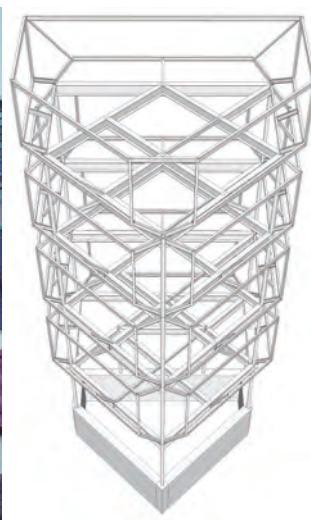
応募代表者：藤 貴彰 (tyfa/ Takaaki Fuji + Yuko Fuji Architecture)

共同応募者：藤 悠子 (tyfa/ Takaaki Fuji + Yuko Fuji Architecture)、川田 知典 (川田知典構造設計)

【応募理由】私たちは、意匠・構造・環境を高次に統合するデザインを指向し、環境シミュレーションを用いる他、素材や工法の新・再発見をしながら建築と向き合っています。

本賞の設立趣旨に「構造だけでなく環境を含めたエンジニアリングと建築 (機能・空間・形態)との融合の有様をアーキテクト・デザインと呼称し、Art と Architecture と Engineering の関係を今一度とらえ直してみたい。」とあり、まさに私たちの目指すところでした。

最優秀賞には一歩及びませんでした。わたしたちと同じ応募者からの学びも多く、実りある審査会でした。審査員・運営委員・応募者のみなさま、同じ時間を共有できたことに感謝いたします。(藤 貴彰)



【講評】 密集する都市における住居のあり方は、将来の気候変動、人口爆発の地域の増加の中で都市への人口集中は特に発展途上地域では今まで以上の密度となることが予測される。これまで都市の狭小住宅として建築家の提案が数多く行われてきていたが、今後は今まで以上に微環境、繊細な構造技術、コミュニティを育むおらかな空間を AI 等の様々な分野の先端技術を総合的に駆使して建築に取り組むことが必要になる。この提案はそれを見据えた未来への新しい可能性をもつ提案である。周囲を取り囲まれた狭小敷地に生まれる周辺との「隙間」を意味のあるポジティブな「IN-BETWEEN」空間とするための変形八角形平面の中層塔状住居とし、最大延床面積と自然光を取り入れやすい出窓の形式を応用した、地震力に耐える「立体多面体」を細い柱で積み上げている。彫りの深い陰を持つ炭化コルクの外断熱外装は熱負荷を緩和し、昆虫が集まれる大木の表面という「自然」を作り出す。出窓開口部の光窓、出窓、壁窓が光と風を微妙に調整し環境負荷を低減する多面体の立体空間は町家や農家の不特定で近隣やコミュニティの居場所にもなるソシオペダルな空間を持つサステナブルな空間を作り出している。(堀越)

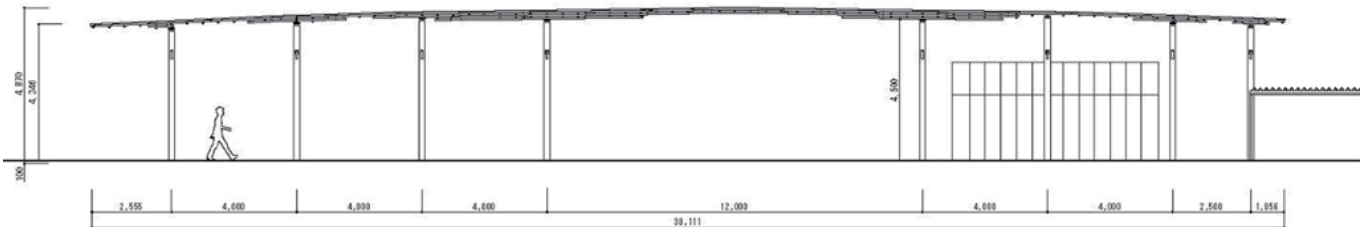
# 優秀賞

## グラウンドルーフ

応募代表者：藤村 龍至 (RFA)

共同応募者：林田 俊二 (CFA)、坪井 宏嗣 (坪井宏嗣構造設計事務所)

【応募理由】 小学校跡地のグラウンドを、隣接する高校が暫定的に利活用するプロジェクトである。スクールバス 3 台分の駐車場を内包する大きな屋根を持つ駐車場棟とトイレ棟、渡り廊下棟の 3 つの建築を設計した。比較的断面の小さな渡り廊下棟から構造材の材寸やモジュールを検討し、50mm 材を 500mm グリッドで組むことにした。駐車場棟では解析結果で NG がなくなるまで繰り返し検討し、必要に応じて段を重ね、最大 40mm のむくりを付けた状態で溶接することで軽やかな屋根を実現した。こうした設計の仕方が AND の理念にも連なると考えていたが、審査では弱いところから決めるプロセスが面白いとコメントを頂き、勇気をいただいた。(藤村龍至+林田俊二+坪井宏嗣)



【講評】 この建築は小学校跡地のグラウンドに隣接する高校が暫定的に利用するプロジェクトで、大きな屋根を持つ駐車場棟とトイレ、渡り廊下で構成されている。スケールも用途も違う 3 つの建築に共通するものとして 50 mm 角型鋼管を 500 mm グリッドでの構成を見出し、大屋根は最大 12m スパンを架け渡すため、必要に応じて互い違いに最大 5 段積層させ、さらに全体的に少し湾曲させた屋根架構としている。

小さなものの集積でできた架構が繊細で清々しい空間をつくりだし、即物的でありながら美しいデザインされている。細い部材で作ろう！というエンジニアの欲でもなく、カッコいいカタチを作ろう！というデザイナーの欲でもなく、恣意性や作家の個性でもない。建築家と構造家の“対話”の過程で作品が高められ洗練された建築空間を生み出していることに好感が持てる。

派手さとか、アクロバティックとか、複雑さとかとは別のところにあり、また、単にミニマルを目指しただけでないプロセスと出来上がった空間に AND の精神を強く感じる作品である。(陶器)



# 入賞

## ステンレスの新しい表情を持つ

### HAGOROMO BENCH

応募代表者：長谷川 寛（竹中工務店）

共同応募者：木下 拓也、小杉 嘉文、田中 匠、小林 大介、山田 基裕、小澤巧太郎（竹中工務店）

Gijs van der Velden、Filippo Gilardi、Kasper Siderius（MX3D）

【講評】応募者が所属する建設会社設計部のオフィスに置かれたベンチである。全体がうねるような不定形の連続面によって構成されている。この自由で複雑な造形は、座る、もたれる、寝転ぶなど、人間の多様な姿勢に寄り添い、様々なアクティビティを誘発するという狙いで採られたものである。この柔らかい形態を、ステンレスという硬い材料で製造する。これには、オランダの MX3D 社とのコラボレーションで、ワイヤー&アーク付加製造による金属 3D プリントの技術が用いられている。先端的な技術が、建築の可能性をどのように切り開いていくのかを示す端的な事例である。書類審査の段階では、材料にステンレスを用いる必然性について疑義も生じたが、対面のプレゼンテーションで持参されたモックアップを手にとることにより、連続溶接されたステンレスの質感の良さを確かめることができた。今後に展開されるであろう、建築本体への応用に、おおいに期待できる技術である。（磯）



# 入賞

## 流山市立おおぐろの森中学校

### サプライチェーンの構築から普遍的な技術の創造まで

応募代表者：小泉 治（日本設計）

共同応募者：市丸 貴裕、草野 崇文、吉岡 紘介、中村 伸、角崎 康太（日本設計）

腰原 幹雄（東京大学生産技術研究所）

【講評】近年に大きな流れとなっている木造の教育施設である。千葉県産の LVL を用いた、耐震要素まで純木造の中学校だ。市松状で開放的な耐震壁は東京大学で実験を行い新しく開発されたものであり、平面計画の自由度と空間の連続性に貢献する。耐火は燃えしる設計とし、慎重なモジュールの設定により歩留まりを高め、適正な性能とコストを実現している。材料の供給から耐震壁の技術開発、平断面計画にいたるまで、全体的に解像度の高い設計が素晴らしい。しかし、日本でも有数の大きな設計事務所と大きな材木会社の協働を、サプライチェーンの構築ということと、LVL という木造の中で限定的な素材を普遍的な技術ということには、いささかの違和感がある。もちろん、1 つの建築が大きなテーマを掲げることに賛成だ。木造という時代の空気感に流されることなく、これからも美しい木造建築をつくり続けてほしい。（福島）





## 入賞

# 千光寺頂上展望台 PEAK

## 山頂に浮かぶ水平と螺旋の構造

応募代表者：野田 賢（金箱構造設計事務所）

共同応募者：品川 雅俊（AS）

【講評】この作品は小高い山の展望台とロープウェイ駅舎の建て替え計画であり、途中既存展望台が解体されることになり、水平のデッキだけが空中に浮かぶような形態となった。機能的にはいわばシンプルな歩道橋であるが、起伏があり大きな岩が点在するという地形条件から、新設基礎による掘削を最小化すること、レベル差により柱長さが異なり曲げ抵抗の柱とすると偏心が生じること、という純技術的課題を解決するために逆V型の支柱を向きを変えて配置し、そのことで、単調になりがちな橋梁構造物に動きを与えている。橋梁の意匠という装飾的なものになりがちであるが、土地に対して正直に、丁寧に向き合った建築家と構造家の対話により、シャープで特徴ある作品となって実現されている。（陶器）



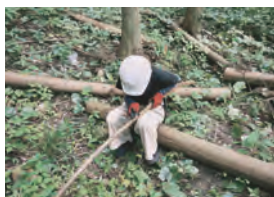
## 入賞

# WASTE PAVILION

応募代表者：濱崎 拳介（九州大学大学院）

【講評】大学の学園祭に使う、仮設の構築物である。身近にあるが利用価値の低い素材を建材として、組立と解体の方法を工夫し、社会の当たり前となっている建築材料の使用と廃棄に新しい視点を与えようとする、小さいながら野心的な作品だ。軸組部材は広葉樹の小径丸太材で、通常はチップにししか使用できないほど変形して短い。その特徴をプラスに捉えて、小部材で大空間を構成できるレシプロカルフレームとしている。接合部には捨てられたペットボトルを、膜には捨てられたビニール傘を再利用している。基礎は建築実験用のコンクリートのテストピースである。施工は学生たちのセルフビルドであり、まさに建築をつくるのが教育の一環となっている。このような大人の賞に飛び込んでくる、若者らしい勇氣は大歓迎だ。

ただ、本当に社会に新しい視点を与えたいのならば、アップサイクルや環境負荷を抑えるなど、使い古されたキャッチフレーズは使わないほうがいい。（福島）



# 入賞

# 斜と構

応募代表者：加藤 大作（UND 一級建築士事務所）

共同応募者：川田 知典（川田知典構造設計）

【講評】現在の都心木造密集地域で一般化してきている、ハウスメーカー、建売業者による定型化した3階建ての木造住宅が立ち並ぶ都市の空間に危機感を抱いた建築家の新たな提案である。定式化した、1階の狭い間口一杯に車の正面が並び、上階に新材の目隠しバルコニーで閉ざされた周辺環境の画一的閉鎖的表情がうちに閉じこもる都市居住の生活をつくりだす現在よりも少し前の、乱雑ではあるが、生活感が出するプリコラージュ的住まいのある路地の密集状態の再構成に可能性を見出す提案である。ここでは3階+塔屋の最大ボリュームの内側に微妙なズレを生み出す多様な階層を3次的に傾けたダイナミックなスケールの立体ブレースが貫き、延焼の恐れのある地域で縛られる開口部のサイズと網入りガラスを取り払う防火シャッターの採用で可能となる密集地域のスケールを逸脱したガラスファサードにより、定型が生み出す必然と思われる閉鎖的な都市の景観に新たな可能性を投じた提案である。（堀越）



## 第3回 AND 賞募集要項

### 応募作品の対象

2017年1月1日より2022年9月末日までに完成した国内作品、あるいは国内在住の設計者等による海外作品とする。

### 応募資格

・個人（複数名も可）による応募とし、重賞も可とする。複数名で応募の場合は、それぞれの応募者が応募業績にどう関与したかを応募シートに明記する。

・一次選考を通過した場合、最終選考会（2023年2月4日（土））に参加し、プレゼンテーションを行う。

### 提出物

①応募シート（A4 1枚） 応募シート

※応募作品の完成年月を明記してください。

②プレゼンテーションシート（A3 1枚） ※形式自由

※①のエクセルデータおよび②のPDFデータ（20MB以内）を提出先までE-mailにて送付してください。

※②のPDFデータが20MBを超える場合はオンラインストレージサービスで送付してください。

※データ受領後、数日以内に「受領確認メール」を事務局より送付致します。本メールを必ず確認してください。受領確認メールが届かない場合は事務局までご連絡をお願いします。

### 応募期間

2022/10/10月）～2022/12/8（木）23:00まで

### 著作権

表彰作品の応募資料として提出された写真・図版等について、AND賞実行委員会は編集出版権を持ちます。また、複写権は本会に委託するものとし、本会が表彰作品の関係資料を展示、記念冊子の印刷、ホームページ等に掲載する場合、無償で使用できるものとします。

応募資料に使用する写真・図版の著作権所有者が応募者以外の場合は、あらかじめ当該著作権所有者の許諾を得た上で使用してください。

### 表彰件数

最優秀賞1件、優秀賞3件程度を表彰する。入賞者には賞状及び記念品を授与する。

### 選考方法

一次選考：書類審査により10作品程度を選定する。

最終選考：一次選考通過者は2023年2月4日（土）開催の最終選考会でプレゼンテーション（プレゼン時間10分程度+質疑応答）を行い、公開審査（一部非公開）により最優秀賞、優秀賞を決定する。



## 第3回 AND 賞 スケジュール

2022/09/10	応募要項公開
2022/10/10	募集開始
2022/12/08	応募締め切り
2022/12/17	一次選考会
2022/12/23	一次選考通過者発表
2023/02/04	最終選考会
2023/02/23	表彰式及び受賞講演会

第3回AND賞最終選考会・タイムライン  
司会：多田修二・大野博史

14:00	開会
14:00	挨拶（斎藤実行委員長）
14:03	挨拶（福島選考委員長）
14:10	プレゼン（4分）+質疑応答（6分） ×5組
15:00	休憩
15:20	プレゼン（4分）+質疑応答（6分） ×5組
15:20	休憩
16:30	最終選考（10作品→4作品）
16:50	休憩
17:00	最終選考（最優秀選考）
17:25	結果発表（福島選考委員長）
17:30	挨拶（斎藤実行委員長）
17:35	閉会



一次選考

### 最終選考



日大 CST ホール



選考委員 磯・堀越・福島・陶器



プレゼンと質疑応答

### 表彰式・受賞記念講演会



## 第4回 AND 賞 2023（予定）

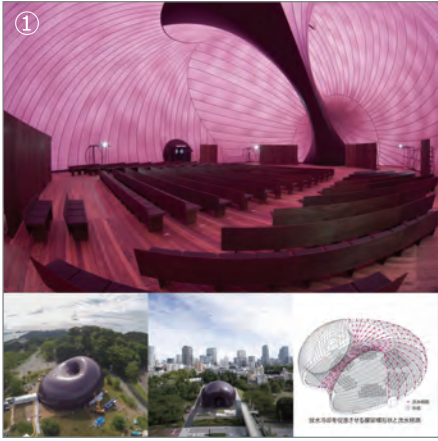
募集要項は第3回に準ずる。  
但し応募作品の対象は2018年1月1日より  
2023年9月末までに完成した作品とする。

### 【日程】

募集要項発表	2023年9月初旬
応募締切	2023年12月初旬
一次選考	2023年12月中旬
最終選考	2024年1月末
表彰・講演	2024年2月末



# 第1回 アーキテクト・デザイン・アワード 2020



## 最優秀賞

① LUCERNE FESTIVAL ARK NOVA

東日本大震災の被災地を巡回する移動式仮設空気膜構造

## 優秀賞

② スケールの異なる複層空間とハイブリッドな屋根構造

〈福井県年縞博物館〉

③ TBM PROJECT - CLT を用いた折板構造 V 字梁 -

④ 細く短い木材を シンプルにつないでスパン 70mを実現する大空間屋根構造

昭和電工 (大分県立) 武道スポーツセンターの屋根構造における

「構造形態」- 「部材構成」- 「接合ディテール」のトータルデザイン



## 入賞

⑤ 文化財の復旧過程を見せるための構造手法 - 熊本城特別見学通路 -

⑥ CRANKS

⑦ 木頭の家

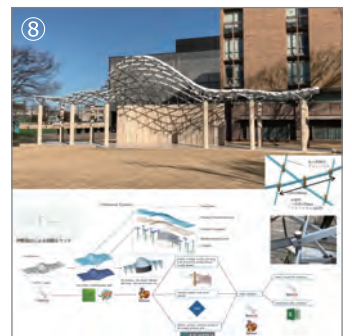
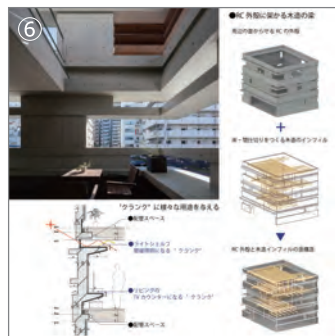
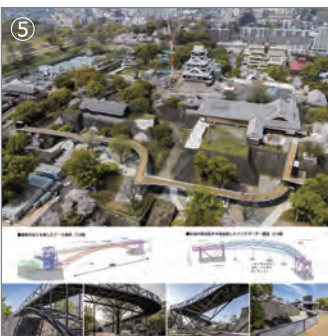
⑧ 洗足学園 STAGE ON THE LAWN

⑨ 垂井町役場

⑩ CLT と鉄骨によるフィーレンディール構造 鳥取ユニバーサルスポーツセンター「ノバリア」

⑪ 自然の力によって波打つ天板

⑫ White Tube - サークルパッキングのアルゴリズムを利用したトンネル空間で、来場者に憩いの場を提供-





## 第2回 アーキニリング・デザイン・アワード 2021

### 最優秀賞

① まれびとの家

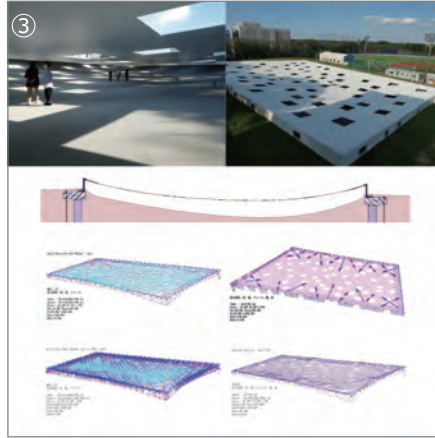
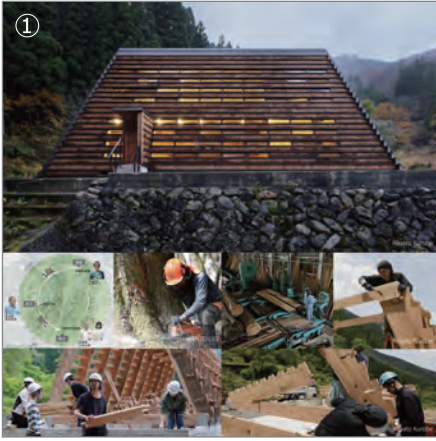
「伝統 X デジタルファブリケーションに構造的な価値付けをする」

### 優秀賞

② 甲陽園の家 (LVL を用いた組木アーチフレーム)

③ 懸垂鋼板が空に漂う KAIT 広場

④ 閑上の掘立柱 - 震災後に嵩上げされた堤防と共存するオフィス -



### 入賞

⑤ GALLERY U/a

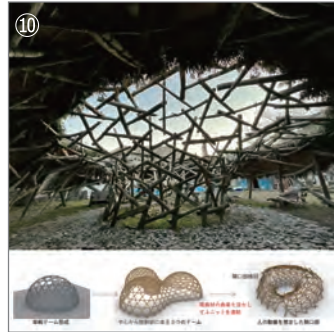
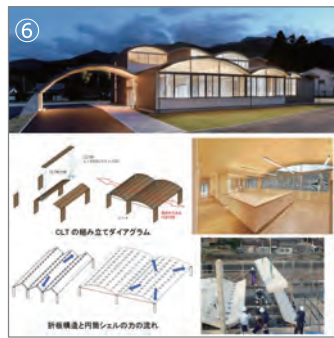
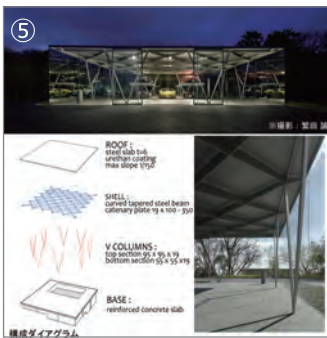
⑥ 山並みに呼応する CLT の連続円筒シェル屋根 <南予森林組合新事務所>

⑦ D タワー西新宿

⑧ CLT 二方向フラットスラブ-木の美しさを活かした環境型ターミナルの設計を通して-

⑨ HIROPPA 「ありきたりな材料とローテクで作られた上品な建築」

⑩ RYUBOKU HUT - 流木を構造体とした縄文建築 -



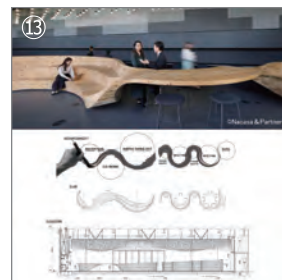
### 入選

⑪ ロッドネットで織物表現 - 桐生ガススポーツセンター (桐生市民体育館) -

⑫ FUJIIHIMURO "氷穴"

⑬ Digital Garage "Pangaea" | Super Furniture

⑭ SQUWAVE ~ 木質パビリオンから始まる人と空間の相互作用 ~







### 第3回 アーキニアリング・デザイン・アワード 2022

実行委員長 齋藤 公男  
選考委員長 福島 加津也  
選考委員 磯 達也・陶器 浩一・堀越 英嗣  
実行委員会 小澤 雄樹・宮里 直也・内海 彩・大野 博史・小西 泰孝・多田 脩二・山田 憲明  
運営委員長 三輪 富成  
運営委員会 和田 章・神田 順・金田 勝徳・松永 直美・春藤 元宏・麓 絵理子 (順不同)

事務局 A-Forum  
101-0062 東京都千代田区神田駿河台 1-5-5 レモンパートIIビル5階  
TEL : 03-5281-7880 FAX : 03-5281-7881 [www.a-forum.info](http://www.a-forum.info)

印刷所 株式会社 グラフィック